

初夢

正岡子規

青空文庫

(座敷の真中に高脚の雑煮膳が三つ四つ据えてある。自分は袴羽織で上座の膳に着く。)

「こんなに揃って雑煮を食うのは何年振りですか、実に愉快だ、ハハ―松山流白味噌汁の雑煮ですな。旨い、実に旨い、雑煮がこんなに旨かったことは今までない。も一つ食いましょう。」

「羽織の紋がちつと大き過ぎたようじゃな。」

「何に大きいことはない。

五つ紋の羽織なんか始めて着たのだ。紋の大きいのは結構だ。(自分は嬉しいので袖の紋を見る。)

仙台平せんだいひらの袴も始めてサ。こんなにキュウキュウ鳴ると恥かしいようだ。」

「お雑煮をも一つ上げよか。」

「もうよございます。屠蘇とそをも一杯飲もうか。おいおい硯と紙とを持って来い。何と書てやろうか。俳句にしようか。出来た出来た。大三十日愚なり元日なお愚なりサ。うまいだろう。かつて僕が腹立まぎ紛れに乱暴な字を書いたところが、或人が竜飛鰐立りようひがくりつと讃めてくれた事がある。今日のも釘立ちかぎぞ蚯蚓飛ぶ位の勢は慥たしかにあるヨ。これで、書初めもすんで、サア廻礼だ。」

「おい杖を持って来い。」

「どの杖をナ。」

「どの杖ててまさかもう撞木杖しゅもくづえなんかはつきやしないヨ。どれでもいいステツキサ。暫く振りで薩摩下駄はを穿くんだが、非常に穿はき心地がいい。足の裏の冷や冷やする心持は、なまゆるい湯婆たんぼへ冷たい足の裏をおっつけて寒

がつていた時とは大違いだ。殊に麻裏草履あさうらぞうりをまず車へ持ててもらつて、あとから車夫におぶさつて乗るなどは昔の夢になつたヨ。愉快だ。たまらない。」（急いで出ようとして敷居つまに躓つまずく。）「あぶないぞナ。」「なに大丈夫サ、大丈夫天下の志サ。おい車屋、真砂町まごぢちやうまで行くのだ。」

「お目出とう御座います。先生は御出掛けになりましたか。」「ハイ唯今出た所で、まあ御上りなさいまし。」「イヤ今日は急いでいるから上りません。」「あなたもうそんなに御宜しいので御座いますか。この前お目にかかつた時と御形容ごようすなどがたいした違いで御座います。」「病気ですか、病気なんかもう厭あき厭あきしましたから、去年の暮にすっかり暇をやりましたヨ。今朝起きて見たら手や足が急に肥えて何でも十五貫位はありましようよ。」「そうですか、それは結構で御座います。まあお上りなすつて、屠蘇を一つさし上げましょう。」「いや改めてゆつくり参りましょう。サヨナラ。おい車屋、金助町だ。」「ヤアこれは驚いた。先生もうそんなにお宜しいのですか。もうお出になつても宜しいのですか。マアどうぞ、サアこちらへ。（座敷へ通る。）お目出とう御座います。旧年中はいろいろ、相変りませず。」「お目出とう御座います。」「今朝もお噂うわさを致して居りましたところでは。こんなによくおなりになろうとは実に思い懸がけがなかつたのです。まだ

それでもお足がすこしよろしているようですが。「足ですか、足は大丈夫ですよ。すこし屠蘇に酔ってるんでしょう。時にきよの飾りはひどく洒落しやれていますな。この朝日は探たんゆう幽ですか。炭取りに枯枝を生けたのですか。いずれまた参りましょう。おい車屋、今度は猿樂町だ。」

「や、お目出とう御座います。留守ですか。そうですか。なるほどこういう内ですか。「まアあんさんちよつとお上りやす。」「いいえ急いでいますから……私の書生の頃この隣の下宿屋にいたのですが、もう十四、五年も前のことですから、この辺の様子はすっかり違っていますヨ。サヨナラ。」

「おやお珍らしゆう、もうそんなにすっかりお宜しゆう御座いますので、まアお上りなさいませ。(座敷に通る。)お目出とう御座います。旧年中は……相変りませず。」「お留守ですか。「ハイ唯今河東さんがお出になって一緒に行きました。」「マーちゃんお目出とう。」「マーちゃんお辞儀おしなさい。このおじさん知っていますか。オホンオホンじいちゃんかネー御病気がすつかりよくおなりなすつていらしたのだからお辞儀をしなくちゃいけません。」「マーちゃんはことし四つになったんでしょう、そうしてあかちゃんの姉ちゃんになつておとなしくなつたからこれをあげるヨ。」「おやいいものを戴いただ

いて、この中には何が這入ってるだろう、あけて御覧んなさい。おやいいもんだネー。オヤもうお帰かえりでございますか。」

「おい君暫しばらく逢わなかつたネー。」「やあ珍らしい。まアお目出とう。」「君はいつから足が立つようになったのだ。僕は全く立たんと聞いていたが。」「なに今朝から立つたのだヨ。今朝立つて見たら君、痛みなどはちつともないのなもの。」「そうか、そりや善かつた。大変心配していたんだヨ。もうとてもいけないだろうツて、誰れか言つた位であつたから。」「しかし君は何処へ行くんだ。」「そうか、それじゃ僕も一緒に行こう。」
「もう午ひるじやが君飯食わないか。」

「それじゃ一緒に食おう。」

「これか、新橋ステーションの洋食というのは。とにかく日本も開らけたものだネー。爰こへこんな三階作りが出来て洋食を食わせるなんていうのは。ヤア品川湾がすっかり見えるネー、なるほどあれが築ちっこう港の工事をやっているのか。実に勇ましいヨ。どしどし遣ちらなくつちやいかんヨ。」「君はどの汽車に乗るのだ。」「僕は二時半の東海道線だが、尤もつとも本所へも寄つて行きたいのだが、本所はずれまで人力で往復しては日が暮れてしまうからネ。」「本所へ行くなら高架鉄道に乗ればよい。」「そうか。高架鉄道があるのだネ。」

そりや一番乗つて見よう。君この油画はどうだ非常にまずいじゃないかこんな書き方つてないものだ。へーこれは牡丹の花だ。これがいわゆる室むろさき咲だな。この頃は役者が西洋へ留学して、農学士が植木屋になるのだからネ。」「オイオイ君ソップがさめるヨ。」「なるほどこれは旨いうま。病室で飲むソップとは大違いだ。」

(ジャランジャランジャラン)

「寝台附の車というのはこれだな。こんな風に寝たり起きたりしておれば汽車の旅も楽なものだ。この辺の両側の眺望はちつとも昔と変らないヨ。こんな煉瓦れんがもあつたヨ。こんな庭もあつたヨ。松が四、五本よろよるとして一面に木賊とくさが植えてある、爰処ここだ爰処だ、イヤ主人が茶をたてているヨ、お目出とう、(と大きな声をする。)聞こやしないや。ここは山北だ。おいおい鮎あゆの鮎すしはないか。そうか。鮎の鮎は冬はないわけだな。この辺を通るのは、どうもいい心持だ。ここが興津か。この家か、去年の秋移ろうかといったのは。なるほどこれなら眺望がいいだろう。」(大阪の連中が四、五人汽車の窓の外に立っている。)

「先生お目出とう御座います。くくくくくく。」「ヤアお目出とう御座います。諸君お揃いで。」「今東京から電報が来たもんですからお出迎えに来たのです。」「そうですか、それは有難う御座いますが、ちよつと国へ帰つて来ようと思ひますから、帰りに

よりましよう。そうですか。サヨナラ。」

「おい車屋、長町の新町まで行くのだ。ナニ長町の新町といってはもう通じないようになったのか。それならば港町四丁目だ。相変らず狭い町で低い家だナア。」

「アラ誰だと思うたらのぼさんかな。サアお上り、お勞れつろ、もう病気はそのいにおなりたのか。」（座敷へ通る。）「アラおまいお戻りたか。」「マア目出とう。おばアさん相変らず御元氣じゃナア。」「いいエおばあはもうぼれてしてもなんの益やくにもたたんのヨ。」「おいさんはお留守かな。」「おいさんは親類だけ廻るといって出たのじゃけれ、もうもんで来るじゃあろ。」「それじゃアあたしも親類だけ廻って来よう。道後どうごが奇麗になつたそうナア。」「そうヨ、去年は皇太子殿下がおいでになるといってここも道後も騒いだのじゃけれど、またそれが止やみになつたということで、皆精を落してしもうたが、こしはお出になるのじゃというて待つておるのじゃそうナ。」「それじゃちよつと出て来よう。」「マアお待ちやお爛かんざけ酒さけだけしようわい。おなかですいたらお鮓でも食べといき。」「いいエもうええ。」「そんならすぐもんでおいでや。こよいはうちへお泊りのじゃあろうナア。」「こよいかな。こよいは是非ぜひ東京へ帰って活動写真を見に行く約束があるから、泊るわけには行かんが。」「そのいにお急ぎるのか。」「そうヨ、今度は

ちよつと出て来たのだから……とにかくうちの古い家を見て来よう。」

「オヤオヤ桜の形勢がすっかり違つてしまつた。親桜の方は消えてしまつて、子桜の方がこんなに大きくなつた。これでこの子桜の年が二十二、三位になるはずだ。ヤア松の梢こずえが見える。あの松は自分が土手から引て来て爰ここへ植えたのだから、これも二十二、三年位になるだろう。あの松の下に蘭があつて、その横にサフランがあつて、その後ろに石があつて、その横に白丁はくちようがあつて、すこし置いて椿つばきがあつて、その横に大きな木犀もくせいがあつて、その横に祠ほこらがあつて、祠の後ろにゴサン竹という竹があつて、その竹はいつもおぼアさんの杖つえになるので、その筍たけのこは筍のうちでも旨い筍だということであつた。そのゴサン竹の傍しやうぶに菖しやうぶも咲けば著しやが我がも咲く、その辺はなんだかしめつぽい処で薄暗いような感じがしている処であつたが、そのしめつぽい処に菖しやうぶや著しやが我ががぐちやぐちやと咲いているというところが、今に頭の中に深く刻み込まれておるのはどういふわけかわからん。とにかく自分が二つの歳から十六の歳まで毎日毎日見たり歩いたりしていたこの庭が、今はどんなになつていゝであろうか、ちよつと見たいと思ふけれど、今は他人の家になつておるのだから仕方がない。垣のぞから覗いて見ようと思ふにも、川の隔てがあるからそれも出来ん。」

「ヤア目出とう。お前いつお歸りたか。」「今歸つたばかりサ。道後の三階というのはこ

れかな。あしやアこの辺に隠居処を建てようと思うのじやが、何処かええ処はあるまいか。
。「爰処はどうかナ。」「これではちつと地面が狭いヨ。あしやア実は爰処で陶器をや
るつもりなんだが。」「陶器とはなんぞな。」「道後に名物がないから陶器を焼いて、道
後の名物としようというのヨ。お前らも道後案内という本でも拵^{こしら}えて、ちと他国の客を
ひく^{くめん}工面をしてはどうか。道後の旅店なんかは三津の浜の舳^{はしけ}の着く処へ金字の大広告を
する位でなくちやいかんヨ。も一歩進めて、宇品の埠頭^{ふしとう}に道後旅館の案内がある位でなく
ちやだめだ。松山人は実に商売が下手でいかん。」

「なるほどこりや御城山に登る新道だナ。男も女も馬鹿に沢山上って行くがありやどうい
うわけぞナ。」「あれは皆新年官民懇親会に行くのヨ。」「それじやあしも行って見よう
。」（向うの家の中に人が大勢立つて混雑している。その中から誰れやら一人出て来た。）
「おい君も上るのか。上るなら羽織袴などじやだめだヨ。この内で著物を借りて金剛杖
を買つて来たまえ。」「そうか。それじや君待つてくれたまえ。（白衣に著^き更^かえ、金剛杖
をつく。）サア君行こう。富士山の路は非常に険だと聞いたが、こんなものなら訳はない
ヨ。オヤ君は爰^{こゝ}に写生していたのか。もう四、五枚出来てる？、それはえらいネー。もう
五合目い来たのか。とにかくあしこの茶屋で休もうじやないか。ヤア日本茶店と書てある。

何がある。しる粉がある？。それならしる粉くれ。頬しきりに皆立って行くじやないか。なんだ。日の出か。なるほど奇麗だ。赤いもんがキラキラしていらア。君もう下りるか。それじゃ僕も一緒に下りよう。なるほど砂をすべって下りるとわけはないヨ。マア君待ちたまえ、馬鹿に早いナア。（急いで下りるつもりで砂をふみ外はずして真逆まっさかさま様に落ちたと思うと夢が覚めた。）

* * * * *

目を明いて見ると朝日はガラス戸越しに少しくさし込んで、ストーブは既に焚たきつけてある。腰の痛み、脊の痛み、足の痛み、この頃の痛みというものは身動きもならぬ始末であるが、去年の暮の非常に烈しい痛が少し薄らいだために新年はいくらか愉快に感ずるのである。アアきようもエー天気だ。

〔『ホトトギス』第四卷第四号 明治34・1・31〕

青空文庫情報

底本：「飯待つ間」岩波文庫、岩波書店

1985（昭和60）年3月18日第1刷発行

2001（平成13）年11月7日第10刷発行

底本の親本：「子規全集 第十二卷」講談社

1975（昭和50）年10月刊

初出：「ホトトギス 第四卷第四号」

1901（明治34）年1月31日

※底本では、表題の下に「子規子」と記載されています。

入力：ゆうき

校正：noriko saito

2010年5月19日作成

2011年5月12日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

初夢

正岡子規

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>